Magami Saga

せつけう くさ しゃうへんせうせつ

説教臭掌篇小説

しびぃぃやぁ Siveeyeah
りゅぅうかう Lyeowcau

さても眞神（まがみ）。

相変わらず雨。

Bus Stop
バス停留所には既に着いていたが……

もしも三方に壁なくば中華庭園によくある東屋に見えなくもない。

外観は実に洒脱だ。珍景とさえ言える。

朽ちて所々を缺くかのような木製のベンチは元々砂浜に打ち上げられ、白く乾燥した流木だったらしい。安房湾にでもあったのだろう。いまは湿っぽく塵埃に塗れ、色褪せた座布団が結わえ付けられていた。

やれやれと彝之龍肯（いのりやう）は嘆息する。

土砂降りにやられつつ三〇分も歩いて来たし、田舎は車で移動することが常態、バス停など高校生以来。しゃうがない。

まあ、いつか、こんな寂れた風情が小説創作の材料になるかもしれない。そう、これからは観念的な小説はやめて、こういう、何というか、侘びた雰囲気を醸すような味わいの文章を書くのもいいかもしれない。

などと頭の先っぽで考えてみるのであった。

くだらない。考えながらも同時にそれについて否定してしまう。それが龍肯の思考の癖

であった。だから余計に頭の先っぽだけで考えているかのような気が自分でもしてきてしまうのである。

空転する焦燥的な思惟。あー、はいはい。それも小説のネタにするのか？　って自問自答。もっと現実的なことを考えよう。やはり車も実用的なものがなくっちゃこういうとき困るよな……

そう。

車は持っていた。先週納車された。Bentley Speed Six　6½（1926- 1930）には幌も附いている。しかし雨の日に乗りたくないのは尤もだった。ベントレーの前がAston Martin One-77だ。これも雨の日に積極的に走らせる車ではない（世界で77台限定生産、価格は一億円以上）が、現代の車なのでクラシック・ベントレーのような保存上の問題はない。なぜだろう。

2台持てないわけじゃないのに、何かそういう利便の追求って邪道だと思っちゃうんだよな。

実際、眞神の連中は皆金持ちばかりであった。彼がセカンドカーでレンジローバーを持っていたって不思議はないのだ。

しかも彼は彝之の氏を名乗る者。King族長の末裔、彝之家なのだ。

特別な家柄であることが彼をして特別な人間であろうとする焦燥を生むのか。

とは言え、本家のある眞神山とはまったく別の所に棲む。

本家ではない。近衛の家系である平衛家のような役割の家柄であった。

いまいる停留所は草裂（くさきれ）バス停といい、籠（こ）ン盛（も）り鬱蒼とした丘と水田との縁を蛇行しながら走る道の旁らにぽつんとあるが、そこから北の丘を登って眞神村の北端部、照葉樹林の繁る丘陵地帯の真ン中、黒龍ヶ淵という深い淵に近い高台に家屋敷がある。

その邸は櫓（やぐら）のような形をしていて、その最上階に立つと欄干から四方が望め、北方に連なる丘の終わるところに横たう龜鹽（かめしお）湖の景観が特に美事だ。湖までの距離は高低差の激しい林道を一時間程度のゆえ、恐らくは空間直線距離にすれば1㎞くらいしかないはずである。

古代にあっては眞神を守る北の要の城砦であった。

どのくらい古代かと言えば、2世紀の遺構が庭から発掘されたこともあり、そこから彝之家の紋である火炎輪昇降龍神天地指翼鳳凰之図を象った土器片が見つかっている。火焔の輪の中に、鳳凰が左右に翼を広げ、向かって右の翼の尖で地を指し、左の翼の尖で天を

指し、その鳳凰に昇り龍と下り龍が絡み、登りは首を左に、下りは右に傾けていて、遠目には焔の円陣の中に卍があるように見える。別称〝火円卍文（くわゑんまんじもん）〟と謂われるのはその所爲（せゐ）だ。

路線バスが来るまでにはまだ時間があった。

眞神村のバスは眞神駅発で私立眞神高等学校経由の眞神村役場行き（及びその逆）しかない。環状に走るので、人によっては歩いた方が早いと言う人もいるが、実際、場所によってはそのとおりなのだ。龍肯の場合は歩かない方が早いが。

八月。昨日までの猛暑が嘘のように肌寒く、気温差は12℃以上、ということらしかった。暑いよりは遙かにましであったが、余程のことでなくてはこんな日に出掛けはしなかっただろう。

その余程のことがあったのである。

ｖｖｗの再結成だ。

ドラムの普蕭（ふせう）やベースの叭羅蜜斗（ばらみと）は健在だが、ヴォーカルの彝之イタルは17歳で焼身飛び降り自殺していた。白羽の矢が龍肯に立ったのである。イタルは二つ上であった。憧れの存在であった。あくがれるという言葉の意味、事象に心惹かれ囚われ胸焦がし魂が身体を離れることそのものであった。

しかしできるだろうか？

確かに声質は似ている。風貌も似ていなくはない。顔に刺青などしないが。しかし彼は青龍の刺青を頭部や顔面の左半分に入れるべきであろうかと、先週は本気で悩み迷っていた。

「やめとけよ」

本家の彝之〆裂（いれつ）は面倒臭そうに言い放ったものだ。イタルの同級生で、バンドの正式メンバーではなかったが、終に2回しかなかったｖｖｗのパフォーマンスのすべてにギターで参加していて、事実上のバンド・メンバーであり、眞神では神と崇められる伝説の存在の一人であった。

「おまえにまで眞神山頂で、あの磐代の上で炎のパフォーマンスをやられちゃたまらないぜ」

そう、自殺ではなく、命を棄てたパフォーマンスだったのである。比喩でなく、命を燃やして見せたのだ。そういう意味では、イタル一人が聖域である山に登り、古代から神聖視されていた大磐の上に立って自らガソリンを被り、炎となって独り叫びを歌い、磐を蹴

って中空に飛翔したのではあるが、ｖｖｗの3番目のパフォーマンスと言えなくもない。

龍肯は当時15歳だった。死ぬのが怖くなかったのか。焼け死ぬのが怖くなかったのか。苦しみや痛みが怖くなかったのか。後悔しなかったのか。何度も考えたものだ。無駄なのはわかっていた。答などありようがないし、言葉や思惟の答があったとしても何の解決にもならず、まったく意味を爲さないからだ。直(じか)に解決する以外の解決はない。一切説教臭いものを唾棄すべきだ、そう魂魄に喚(をめ)き叫んで何年を無爲の侭過ごしたことか、進捗の莫い侭に幾つの夏を見送ったことか。

中学生当時、ニーチェやハイデガーやデリダを好んで読んでいた龍肯はイタルの死以来一切の哲学書を封印している。言葉や思惟には何の力もない。何の援助にもならない。結局死の恐怖が超えられなければ何も解決などしないのだ。

バス停でぼんやりするうち思惟は廻り出し、またも悩み始めていた。

『ゲームでもしよう。おかしな事を考えてしまう』

スマートフォンを出し、インターネットゲームを始めた。

眞神の5～45歳までの半数以上はReal World（ＲＷ）というＲＰＧをやっている。ちなみに15～35歳だと8割を超える。凄い確率だが、この地域の結束は異常に強いのだ。

ＲＷに無料登録したユーザーはアバターと呼ばれる好きなキャラクターを作って（複数を作成し、同時に稼働することも可能）、Interactive（双方向的・会話的）なVirtual Reality System（実質的現実の装置・人工的現実感を生じさせる仕組み）によって、自分の創ったアバターとして現実世界のようなＲＷの中で生き、生活し、活動し、冒険することができる。その中に入ると、まるで違う世界にいる、現にそこにいて、まさにそこで呼吸しているかのよう体感するので、むしろシミュレーテッドリアリティ（Simulated Reality）というべきかもしれない。

ユーザーは世界中にいるが、完全な同時翻訳システムがある。つまりアバターはユーザーの言葉をしゃべるわけだが、すべてのユーザーがその言語を理解し、相手に自分の言いたいことを伝えることができる。会話することができる。

ＲＷの特徴はそれだけではない。

自分好みのアバターを創って活動できるだけでなく、創世界(ゲネシス)システムΓένεσηςSystem Serviceを利用して自分の（好きな）世界を創り、ＲＷ内に別ゲートを設けてそこからログインし、その世界を生きることができた。なおユーザーの創った世界はワールドWorldと呼ばれる。

世界を創るにはある程度の知識や理解が必要だが、さほど高度ではなく、眞神に住む人間が創った世界（ワールド）がいくつかあった。代表的なワールドは、

- イデアル・アース Ideal　Earth 略称ＩＥ
- ユッグドラシッル Yggdrasill （古ノルド語。「世界樹」のこと）略称ｙｇｇ（ユグドラシル）
- ムンドゥス Mundus （ラテン語。「世界 The World」を意味する）略称Ｍｕ（ムー）
- 神統記―神々の系譜―テオゴニアーθεογονια（古代ギリシア語）略称Θ（シータ）

など。

龍肯はＩＥとΘに登録し、そこのアカウントを持っていた。ユーザーの名称はそのまま龍肯 Ryau だ。ハンドルネームを使ったって眞神の人間にはどうせわかるのである。逆にわからない人間には本名かどうかすら区別できない。ＩＩＡＥ（イア）（Interactive interfaces attached to the ear）を耳に差す。

ブレイン・マシン・インタフェース（Brain-machine Interface　ＢＭＩ、脳と機械とを仲介する装置）の一つで、精緻微細な電気信号が脳神経細胞（ニューロン）に伝わり、グルタミン酸、γアミノ酪酸、アスパラギン酸、ニューロテンシン、ノルアドレナリン、ドパミン、セロトニン、アセチルコリンなどの神経伝達物質が分泌され、シナプスを介して軸索から次のニューロンの樹状突起へ〝翔ぶ〟。

これによって特定のイオンを流入させる細胞被膜の伝達経路が開かれ、そのイオンが流入すると膜内外で電位が逆転し、このことが発火的な現象として現出し、則ちこれがインパルスだ。インパルスはニューロンの軸索にあるシナプス小胞を刺激し、再び神経伝達物質が次のニューロンの樹状突起へと飛ばされる。そのニューロンにおいてもイオン伝達経路が開かれ、インパルスが起こる。こうして発火的現象が次々連鎖し、これが人間の思考や感情を做す。哲学や数学を生む。

つまり我々の哲学的煩悶も連立方程式を解く思考も、いやそればかりか家族への愛も神への信仰も正義を貫く意志も生命を賭した友情も喜びも哀しみも怖れも憤りも空腹も痛みもすべてこれによって生じている。事象に関するすべての理解も認識もこれに拠っているのである。妄想も空想もこれに拠っているのである。

芸術を理解し、感受することも。

この絶妙な作用が狂えば事象も感情も感受も異なるものとなってしまう。まさしくすべては微妙なバランスの上に刹那的に現れる象（かたど）りだ。現象だ。実体はない。

本質的な〝かたち（特性）〟など持ちようがない。

しかもすべては発火的現象だ。

我々は何を知っていることになるのだろうか。何を見て何を聴いているのだろうか。すべての行爲は何の意味になり得るのであろうか。答を求めても、風や雲や潮や砂塵に問いかけて答を求めるに等しい。

だから自分がいま見ている雨も草木も土も、現実の雨や草木や雲と同じではない。だいたい「同じ」も「異なる」も本質性のない、現象じゃないか。霧や山や磐や流水と変わらない。『同是即不同也　異也不異（同じは同じではなく、異なってはいても異なってはいない）』というわけだ。そう考えれば何かを何かで言い表したり、何かを何かで理解したりすることなどできはしない。

ああ、わかってるよ。

龍肯は独り言ちた。

そんなこと、知っている人なら誰でも知っている。多くの人が一度は考える。

だけどそれを本当に納得し、真に体得し、完全に覚悟している人はいない。

知っているということや理解しているということは、何かを知っていることにも理解していることにもならない。それは二重の意味でそうだ。思考も感情も発火的な現象でしかないからというのが理由の一つだ。

もう一つ。我々が通常言う『知る』ということが何かを知ったことにはなっていないからだ。

ああ、そう、たとえばイタルのことを考え出すと頭に浮かんで離れなくなるあの問題、死だ。

誰でも死ぬことはわかっている。あたりまえと思っている。しかもその時期は特定できないことも理解している。いまかもしれないし、100年後かもしれない。でも死を宣告されれば動揺し、落胆し、絶望する。何をしても無駄のように思え、無気力になる。生活を支えていたすべてが崩壊し、気力が喪われる。

つまり本当に死ぬとは思っておらず、感覚的には永遠に生きるようなつもりでいたということだ。そうでなくては生活など成り立たない。そうでなくては生きる力など湧かないのだ。

本当に知るとは体得し、覚悟することであると言えよう。それ以外は表層上の記号の羅列に過ぎない。

イタルは死んだ。彼は怖れなかったかのように見える。それは死を〝知っていた〟から

なのだろうか。

だがそれがわかって何になる？　もし正気を喪えば自分はいまの自分でなくなってしまうかもしれないのに。ああ、そんなことが心配なのか。そんなにも惜しいのか？　この意識、すなわちこのコンテンツの現実的な存在は化学的な現象に過ぎない。発火的な事象の絶妙のバランスの上に刹那に結ばれた現象でしかないのに。

だめ！　だめ！　だめ！

これもそれも全部、頭の尖っぽで考えただけだ。

でもそれを覚悟すれば悟道できるのか。しかしそんなこと実現できるか。

……ともかくもそういうことなのかもしれない。

すべてが縁起説のような現象だと悟ることができるならば、そういう思考法が完全に習慣的・生理的に定着し、覚悟が肚に坐るならば、死は超えられるのかも……

わからない。

論理を積んだって莫迦らしいだけだ。

ああ、そう思えば俺がいままで書いてきた小説なんて何て莫迦らしいものだろう。くだらない。

説教臭い小説なんて糞喰らえだ。

って、こういう話がもう説教臭いよ。